

荒木山通信

令和元年8月

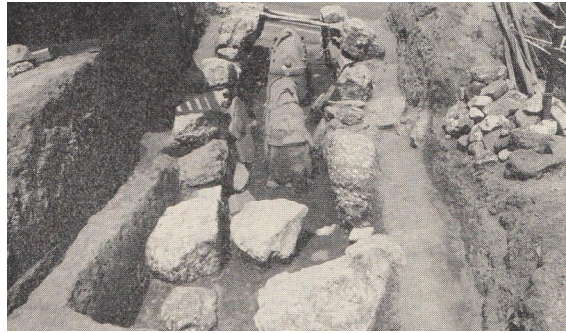
第6号

荒木山の古墳
を顕彰する会

北房の古代が熱い！

国道三三三号線が下中津井の蟹川から中津井の街に入る所に「貝原ダワ」と呼ばれる小さな峠がある。古くはこの道は無く、中津井川沿いを少し下って川を渡り皆部へと出ていたと言う。峠の信号の傍を西側の山へと上ると、左手に芋岡の観音堂に続く墓地群が見えてくる。この丘陵の途中を切り割って道を通し、その先に丸山を残しているのがよく分かる。

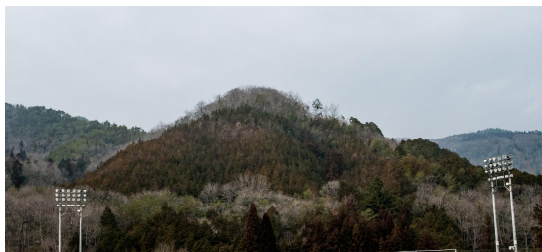
昭和五十三年（一九七八）、国道拡幅のため発掘調査がなされた土井二号墳は、その堀切の中にあり、以前の宅地化や道路の新設などにより墳丘と天井石は削平されていたが、横穴式石室内から多量の遺物が発見され



〔土井2号墳の横穴式石室全景〕 北房町史より



〔頭椎大刀〕（土井2号墳出土） 北房ふるさとセンター



〔佐井田城址遠景〕 運動公園側から

た。その中には十二体余の人骨や犬の頭骨なども含まれていた。陶棺内からは美しく飾られた金銅製の「頭椎大刀」（約一〇〇cm）が出土し、被葬者は畿内政権の護衛兵で、任務を終えて下賜されたと思定された。古墳は六世紀

の後半に造られ、約一五〇年間追葬がなされたという。前述のとおり、当時は貝原ダワは無く、丘陵の南西（中津井の街側）裾に石室の出入り口があり、度々追葬がなされたのである。この土井二号墳は、対岸の下村古墳と共に中津井地域の有力家父長の墓所と考えられている。此処にもローマンの遺跡が眠る。

【特別寄稿】

ザ・ブラザ
ふる里

新緑の山々は美しくこの里をつつみ、その中に中世の名山城、備中佐井田城址がある。城址からこの城に由来する山々が眺望できる。眼下に中津井での源平合戦の古戦場があり、源氏方が陣を備えた丸山、そして備中の平家方が集結し陣を備え対峙した東山が見える。平家方は数日の熾烈な戦いで滅亡したといわれ、戦功のあった山田重英がこの要衝の地に佐井田城を築いたといわれている。



〔佐井田城址五の壇からの遠望〕

その際に高機山に勝利の旗を立てたことから建旗山と呼ばれるようになったという。ちなみに、平安時代に大嘗祭の主基田が中津井に設けられた時の和歌に高機山が詠まれている。色々におれる錦と見えつる
は高機山の紅葉なりけり
前筑前守五位上
藤原朝臣経衡

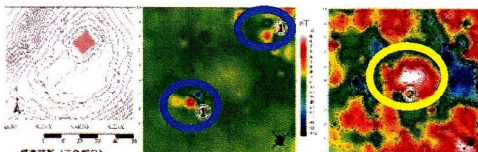
そして、この峰続きの真窪山は援軍を求めた使者が合図の「のろし」をあげた山とされている。古代、中世、近世の文化遺産が集積しているこの「悠久の里・中津井」のロマンは奥深く広い。
（中嶋ひろし）

東塚調査報告第二弾 墓壇に副葬品か？ 磁気探査で判明！

前号でレーダー探査の結果、後方部に割竹形木棺直葬か粘土槨の墓壇と竪穴式石室らしき施設が確認されたことをお伝えしました。今回は、磁気探査により金属製の副葬品らしき反応が確認されたことをお知らせします。

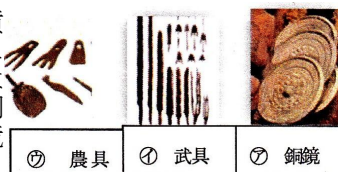
左図①の右側です。

磁気探査の結果 図① 左の赤色が後方部
中央の赤い反応（青の輪）は金属ゴミの反応
右側の白い反応（黄の輪）が副葬品らしき反応



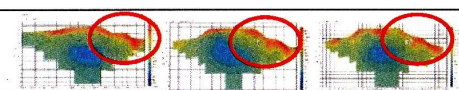
金属製の副葬品は⑦⑧が想像されます。私には⑦を期待したいのですが、正確には発掘しないと分かりません。

せん。副葬品は、当時の北房の様子を知る重要な手があります。金属の加工技術や大陸及び他地域との繋がりも想像できます。初期の古墳には銅鏡が副葬されている場合も多く、もし三角縁神獣鏡（魏の国王が邪馬台国の女王卑弥呼に贈った鏡）でも副葬されていたら大事です。



中世、山城に改変！

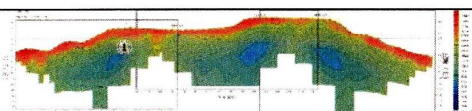
次に、電気探査の結果です。図②が後方部二カ所と



上図② 右から後方部墳端、中央部前方部墳端

○ 印の北西（北房中学校）側で盛土が多い。

下図③ 墳丘の縦断面、右が後方部、左が前方部



中世山城改変想像図⑤
(周りに土塁を築く)



古墳築造時の想像図④
(前方後円墳の例)

前方部一カ所を電気で横割りした図で、図③が墳丘全体を縦割りした図です。赤い部分が人の手で盛土した部分です。古墳築造時の盛土なのか、中世の山城に改変した時期の盛土なのかは実際に発掘で土質を調べないと分かりません。

図②では急斜面の北西（北房中学校）側で多くの盛土が見られます。おそらく中世の戦いに備えた土塁築造のためでしょう。南東側は掘削して兵士が集まる平坦面にしたのでしょうか。前方後

古代の道の謎

荒木山の古墳を顕彰する会

副代表 南條保之

古代の人々はどうのようにして北房の地にやって来たのだろうか。

昭和四八年に中国自動車道の建設に伴い発掘調査が行われた。最初に行われたのが五名の備中平遺跡で、発掘調査の結果、縄文時代から中世に至る多くの遺構、遺物が発見された。中でも表面に米粒状の文様が施された押型紋土器があり、これは縄文時代の早期に流行したもの、北房では最も古い人類の活動を物語る遺物である。また、上水田の谷尻遺跡、下皆部の空遺跡でも同様の土器が発見されている。縄文時代から北房の地に人々が居たことが確認されたが、少量であり、

方墳の形状がかなり改変されています。つまり古墳築造時の想像図④が、中世山城として想像図⑤のように改変されたのでしょうか。なんとも辛い感じです。

ともあれ、現状では前方

後方墳の形状は認められるので、一層整備して皆様の古墳見学に備えます。今回は、三次元測量の結果を素晴らしい画像で紹介いたします。

(奥田健治)

極めて短期間、あるいは小集団の生活痕跡を物語るものであろう。

時代は下り弥生時代（紀元前四〇〇年〜紀元後二五〇年）になると、中津井の白鳥谷遺跡、皆部の桃山遺跡、上水田の小松遺跡、中田原遺跡、谷尻遺跡が発見されている。中でも谷尻遺跡では、多くの竪穴式住居と墓が発見されており、集落を形成し水田開発、経営を行っていたと考えられている。これらの住居跡からは、壺、甕、高坏、鼓形器台など多くの土器が発見されている。県南部の物も多いが、特に畿内系が多い。このことから、畿内から移り住んだ集団ではないかと考えられているが、どこをどのようにして来たのか立証するものは無い。やがて古墳時代（三世紀

（七世紀）に入ると荒木山東塚を最初とし北房の地域に二五〇基余りの古墳が築かれることとなる。（ちなみに荒木山東塚は、時代的に考えると谷尻遺跡の首長墓の可能性も。）

七世紀に築造された六基の方墳、その中で大谷一号

崇神天皇陵を 拝す

「山辺の道の勾の岡の上にある」と記紀が記す崇神天皇陵の拝所に立った。手つかずの深い森を水鏡に、周濠の緑が美しい。

大和朝廷の創始者とされる第十代天皇で、四道（北陸道・東海道・西道・山陰道）へ將軍を派遣し、全国を教化したとされる。（ちなみに、西道へ遣わされたのが吉備津彦である。）また、戸口調査をして初めて課役を科すなどの偉業を成したとされる。

古墳は全長が約二四二m、後円部の径は約一五八m、その高さは約三一mで、全国十六位の巨大前方後円墳である。築成は、四世紀後

墳は大和政権から派遣された吉備の大宰石川王の墓と考えられている。では、どのような道を通ってきたのか。また、どのような方法で中央と連絡を取っていたのか。それを探る資料は見当たらない。

時代はずっと下り、戦国



【崇神天皇陵正面の拝所】

半（古墳時代前期後半）の早い時期とされる。

私たち一行五人が周濠の堤を時計回りに進むと驚くべき光景が出現した。なんと濠が三段に築かれているではないか。池を三段に積み重ねた様である。不思議な感覚でいると、六、七人の若い男性が濠の外を巡っている水路の点検をしているのに出会った。

時代佐井田城攻防の戦史に見られるように、宇喜多・毛利・尼子等が南北の道から二万、三万という大軍で押し寄せ攻防を繰り返したという。永禄十二年（一五六九）、植木秀長は毛利元清の三万騎の大軍を迎え佐井田城に籠城した。備前の

「この濠は、最初から三段に造られているんですか？」

カーキ色の揃いの作業服の中のリーダー格がマスクの中から答えた。

「元々は十段ほどもあったのを織田氏の時代に、農民の水不足解消のために改変しているんです。」

彼らは宮内庁の職員で、陵墓の点検に回っていると言いつつ、やがて古墳の深い森へと消えて行った。周濠は、左側が三段に、右側は二段に築かれていた。

文献によれば、幕末に江戸幕府が荒れ果てた御陵の修復を各地の大名に命じ、この柳本藩の藩主であった織田信成は水不足から農民を救うため、濠を大きくし、水出し（濠の水を利用する）の特権を幕府から得たと

宇喜多に加勢を乞うため家臣嶺本与市が十一月十三日、夜陰にまぎれ岡山へ走り、十五日午後には救援を知らせる狼煙を真窪山にあげたという話がある。岡山まで二十里の道を四十数時間で往復したことになるが、どの道筋であったのか。想像に

われている。柳本町自治会では、今でも毎年七月に藩主の子孫を招いて「藩主祭」を行い、遺徳を偲んでいるという。

この古墳は、奈良県天理市柳本町字行燈に在り「行燈山古墳」とも呼ばれている。なお、崇神天皇については諸説あり確たる定説は無いようだ。



【崇神天皇】

「大日本帝紀要略」から

初代神武天皇から九代の開化天皇までは、畿内にしか力が及んでいなかったが、崇神天皇の代になって初めて大和政権が全国規模にな

過ぎないが、有漢、吉備中央、足守、岡山の線ではなからうか。
古代の道は、旭川沿い、高梁川沿い、山越え、三つのどの道であったのだろうか。

つたという説もある。

また、没年を二五八年説をとれば、邪馬台国の時代後半と重なることになり、邪馬台国とヤマト政権（初代崇神天皇）との関連が問われることになる。謎とロマンの尽きない崇神天皇陵であった。

（久松秀雄）

《入会すめ》

趣旨に賛同し入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。年会費三千元は、入会時に納入下さい。我々と一緒に活動や研修をしようではありませんか。会員へは、活動状況や計画、研修会・講演会等の案内をします。

古市・百舌鳥古墳群

世界遺産に――！

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問 戸村 彰孝

〇 古市・百舌鳥古墳群が
世界遺産に――

五月十五日、各紙の朝刊は仁徳天皇陵（大山古墳）や応神天皇陵が世界遺産に登録されるといふニュースで大騒ぎ。地元は観光で、研究者は天皇陵の公開や発掘を求めて智慧比べが始まる。

そこで私は昔のことを思い出した。戦時中、国民学校で習った、仁徳天皇が高殿に立って村々のかまどの煙が消えている状況を見て心配された話を――。

図書館を訪ねて、昭和十八年発行の「初等科国史 上」を見つけた。今、八十五歳前後の人は、この教科書で勉強したのである。このことが既に歴史の一齣（ひとま）となつてしまつた。一節を再録してみた。

〇 大和の國原
かまどの煙 〇

第十六代仁徳天皇は、都を難波におうつしになりましたが、それも、半島との交通の便をお考えになつたことであります。……

不作の年が続いたころのことです。ある日、高殿にのぼつて、遠く村里のやうすをのぞきながら立ちのぼる民家から煙一すぢ立ちのぼる民家の苦しみのほどを深くお察しになつて、三年の間、税ををさめなくてもよいことになさいました。ためにおそれ多くも、御生活はきはめて御不自由となり、宮



【仁徳天皇】

居の垣はこれ、御殿もかたむいて、戸のすきまから雨風が吹き込むほどになつていきましたが、天皇は、少しもおいとひになりませんでした。

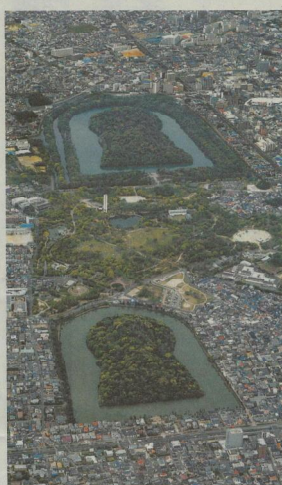
かうして、三年ののち、ふたたび高殿からのぞきながら、今度は、かまどの煙が、朝もや夕もやのやうに、一面にたちこめてゐます。天皇は、たいそうお喜びになつて、「朕すでに富めり」と仰せになりました。

〇 この故事は八世紀初頭撰上された古事記や日本書

記に記載され、十三世紀鎌倉時代の方丈記にも「伝え聞く、古の賢き御世にはあはれみを以て国を始め給ふ。すなはち、殿に茅ふきても、軒をだにとゝのへず、煙の乏しきを見給ふ時は、かぎりあるみつき物をさへゆるされき。是民をめぐみ、世をたすけ給ふによるなり。今の世のありさま、昔になりぞらへて知りぬべし。」と

鳴長明は書き記した。今の子供たちは、古墳時代・大和朝廷などの項目で学習しているのだろうか。

市街地の密集古墳 評価 百舌鳥・古市古墳群 世界遺産へ



百舌鳥・古市古墳群。上が大山古墳（仁徳天皇陵）。＝堺市、本社へりから、小林裕幸撮影

開発の脅威に古墳に対する関心が高まっている。市街地に密集する約400古墳で構成される「百舌鳥・古市古墳群」がユネスコ「世界遺産」に登録される。文化遺産の「世界遺産」に登録される古墳群は、日本では「百舌鳥・古市古墳群」が初めてである。この古墳群は、古墳時代中期から後期の約1000年間にわたって築かれた古墳で、その数は約400に達する。この古墳群は、古墳時代中期から後期の約1000年間にわたって築かれた古墳で、その数は約400に達する。

【古市・百舌鳥古墳群の世界遺産登録を伝える記事】

（五月十五日の朝日新聞朝刊の一面）

令和元年度

後期の活動

― 墳丘調査への協力と
環境整備へ向けて ―

平成二十八年二月発足以来、古墳やその周辺・登山道の整備や掃除を続けてきました。引き続き行いたいと思います。また、市へ依頼していた測量調査が昨年から始まり、本年度も引き続き行われます。昨年度は東塚でしたが、本年度は西塚が調査されます。本会としても調査に協力し、その結果に期待したいと思っております。会員は元より、皆様方のご協力・ご支援をよろしくお願い致します。春にできなかった柴かきも調査が始まる前には行いたいと思っております。そして、古墳の雄姿が少しでも見えるようにと行った東塚北側斜面の雑木や竹の伐採作業も引き続き行っていきます。ものと考えています。通信や調査報告会等で、この古墳の素晴らしさも伝えて行きたいと考えています。